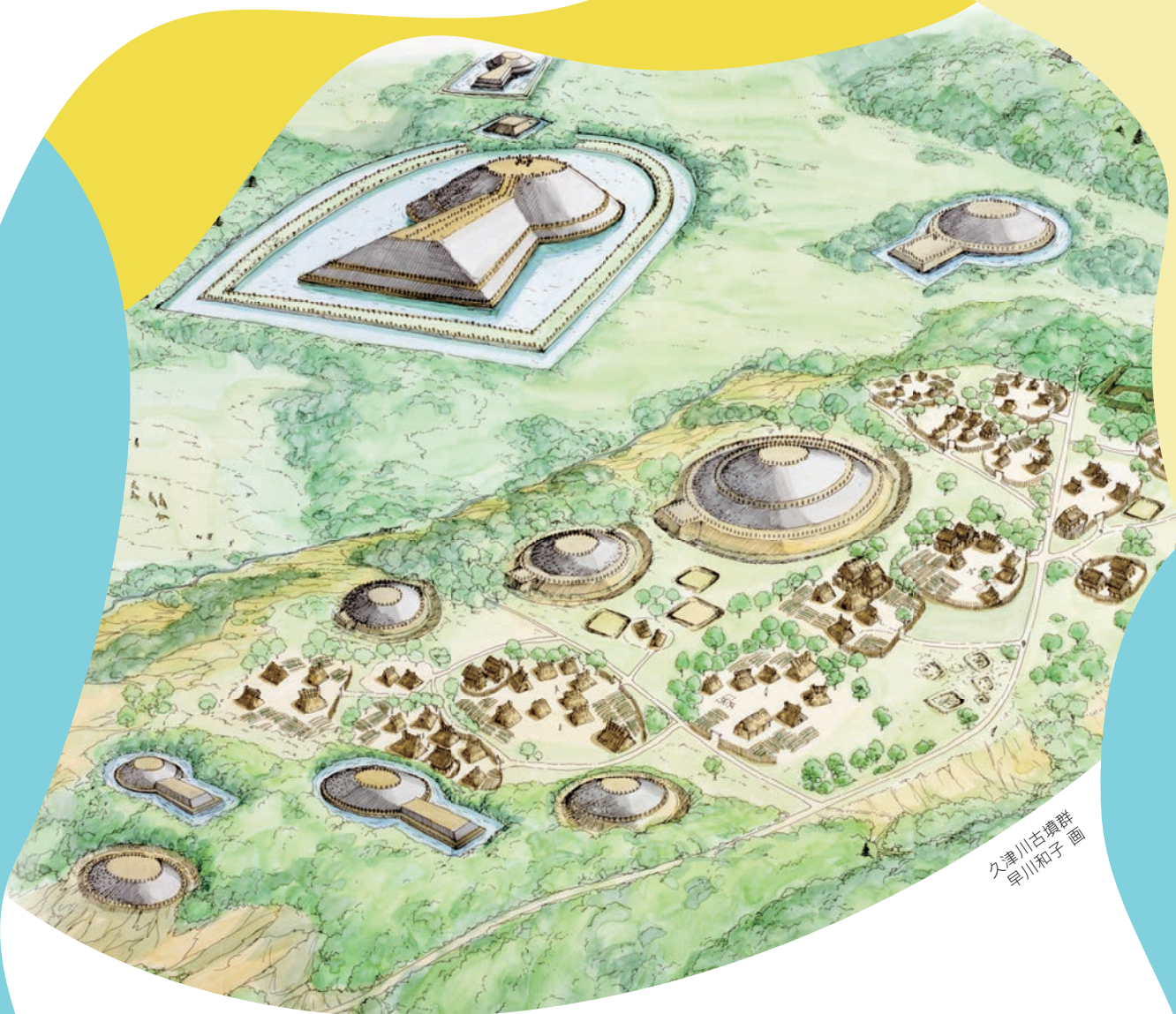


第149回
埋蔵文化財セミナー



2022.09.17 / 土

文化パーク城陽 大会議室
13:30-16:30 (開場 13:00)

近年

明らかに became

南山城の

古墳時代

主催：京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
後援：城陽市教育委員会

第149回埋蔵文化財セミナー

「近年明らかになった南山城の古墳時代」

日 程

13時30分 開会あいさつ

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
常務理事 事務局長 阿部篤士

趣旨説明

筒井崇史

13時40分 報告1 「久津川車塚古墳の発掘調査」

城陽市教育委員会文化・スポーツ推進課
文化財係長 浅井猛宏氏

14時30分 休憩

14時40分 報告2 「京田辺市天理山古墳群の発掘調査」

京田辺市市民部文化・スポーツ振興課
主 事 上野あさひ氏

15時30分 休憩

15時40分 報告3 「城陽市小樋尻遺跡の発掘調査」

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
副主査 小泉裕司

16時30分 閉会

主 催 京都府教育委員会
公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

後 援 城陽市教育委員会

会 場 文化パーク城陽 大会議室

くつかわくるまづか 久津川車塚古墳の発掘調査

城陽市教育委員会文化・スポーツ推進課

浅井猛宏

1. 久津川古墳群について

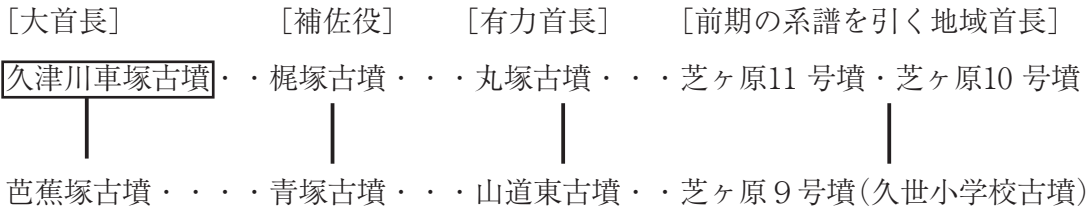
(1) 久津川古墳群の特徴

- ① 木津川東岸の宇治市南部から城陽市北半部の範囲で、丘陵上及び丘陵から木津川へ流れる河川が形成した扇状地上に築造される。
→ 広野支群・久世支群・富野支群の3つの支群で構成
総数約 150 基（現存する古墳 34 基）……京都府内最大級
- ② 古墳時代前期～後期・終末期の各時期の古墳が存在する。
- ③ 久世支群（大谷川扇状地とその周辺の丘陵上）に前・中期の古墳が集中する。
- ④ 5世紀に南山城地域を支配した2代にわたる大首長の古墳（久津川車塚古墳と芭蕉塚古墳）が存在する。
- ⑤ 一部の古墳を除いて、埋葬施設に石材を使用しない。

(2) 久津川古墳群の変遷

- ① 3世紀前半 …… 芝ヶ原古墳の築造
→ 地域を治める最初の首長が出現
- ② 古墳時代前期（4世紀）… 丘陵上に古墳が築造される。
→ 地域を治める首長たちの出現
* 主な古墳：西山古墳群、上大谷古墳群、尼塚古墳群、尼塚古墳、梅の子塚古墳群
- ③ 古墳時代中期（5世紀）… 平地に大規模な古墳が築造される。
→ 南山城地域を治める大首長の出現
* 平地の大規模な古墳：久津川車塚古墳、芭蕉塚古墳、丸塚古墳、山道東古墳、山道古墳、梶塚古墳、青塚古墳
* 丘陵上の大規模な古墳：芝ヶ原 11・10・9号墳（久世小学校古墳）
- ④ 古墳時代後期（6世紀前半）… 丘陵上に中型古墳が築造される。
→ 大首長や有力首長がいなくなる。
* 主な古墳：上大谷 1号墳、芝ヶ原 5・6・7号墳
- ⑤ 古墳時代後期（6世紀後半）… 中型古墳は姿を消し小型古墳のみ築造される。
→ 地域を治める首長はいなくなる。

(3) 久津川古墳群にみる大首長による南山城地域の支配



2. 久津川車塚古墳について

- ①立地：平地(大谷川扇状地)
- ②墳形：前方後円墳(3段築)
- ③規模：二重の周濠を含めた全長約272m、墳丘長約175m→山城地域最大級
- ④外部施設：周濠・外堤・外濠
- ⑤外表施設：葺石・埴輪
- ⑥埋葬施設：長持形石棺直葬(後円部)、石棺の両小口に小石室
- ⑦出土遺物：銅鏡、鉄製武器・武具、玉類、石製品
- ⑧築造時期：5世紀前半(古墳時代中期)
- ⑨備考：国指定史跡(昭和54年1月19日指定)
 - 平成28年10月に追加指定及び名称変更され、丸塚古墳・芭蕉塚古墳・久世小学校古墳とあわせて「史跡久津川古墳群」となる。
 - 長持形石棺・・・重要文化財(平成3年6月21日指定)
 - 銅鏡7面・・・重要文化財(昭和28年11月14日指定)

3. 久津川車塚古墳の史跡整備に伴うこれまでの発掘調査成果

(1) 各年度における調査場所

平成26(2014)年度：西造り出しの存在を確認

平成27(2015)年度：西造り出し全体

平成28(2016)年度：西くびれ部及び西造り出し北端

西くびれ部の上段斜面・中段テラス及び斜面

平成29(2017)年度：後円部西側下段テラス及び斜面

→渡り土手の存在を確認

西くびれ部の上段斜面・中段テラス及び斜面

平成30(2018)年度：後円部西側の渡り土手と外堤上面及び周濠側斜面

令和元(2019)年度：後円部北側及び西側の上段斜面・中段テラス及び斜面・下段テラス及び斜面

令和2(2020)年度：前方部南西側の下段テラス及び斜面

令和3(2021)年度：前方部南側及び南東側の上段斜面・中段テラス及び斜面・下段テラス及び斜面
東くびれ部の上段斜面・中段テラス及び斜面

→今後も史跡整備に必要となる資料を得るために、継続的に調査を実施予定

(2)主な調査成果

①西造り出し(平成26～28年度)

- ・墳丘西側の前方部下段斜面からくびれ部に接する位置で、造り出しを確認した。
- ・前方部下段斜面途中から張り出すように一体的に地山から削り出して成形しており、上面には礫を敷き、各斜面には葺石を施している。
- ・各斜面の葺石は墳丘と同程度の10～20 cm大の石材を用い、斜面裾には30 cm大の基底石を据えている。
- ・上面規模は東辺約20.6m、西辺約19.6m、北辺約11.9m、南辺約11.7mで、裾部の規模は南北が約31m、東西約13mの長方形を呈しており、高さは西側の周濠底から約3.1mを測る。
- ・上面には円筒埴輪と朝顔形埴輪により囲まれた方形区画があり、その内部は南半の埋葬空間、北半の儀礼空間の大きく2つに区分することができる。

→南半の埋葬空間

- ・長方形の墓坑に組み合わせ式木棺を納めた埋葬施設
- ・棺内副葬品と考えられる刀剣や滑石製玉類が出土
- ・上面には家形埴輪などの形象埴輪を配置

北半の儀礼空間

- ・小型の土器がまとまって出土
- ・食物形土製品や^{ざる}笊形土器から、食物供献儀礼の場として想定
- ・墳丘と接続する南北の谷線には、40 cm以上の大型の石材を用いた石列を通し、特に後円部との間の北側谷線においては石列中腹付近で1 m四方の平坦面が構築され、導水施設を表現した埴輪がまとまって出土した。→祭祀の場
- ・造り出し南北両谷線を下った地点(周濠底)では、葺石と同じ大きさの石敷きが広がり、水鳥形埴輪が配置されていたと考えられる。

②渡り土手(平成29・30年度)

- ・後円部西側において、後円部から外堤までをつなぐ渡り土手を確認した。
- ・地山を削り出して成形し、薄い置土をした後、上面には礫を敷き、斜面には葺石を施している。
- ・斜面の葺石は、後円部の葺石よりも小さい5～10 cmの丸みを帯びた石材を用いており、斜面裾には15 cm大の石材を用いた基底石を据えている。

- ・規模は、上面長さ約16.5m、上面幅約5.4m、下端幅約9m、高さ(周濠底から)約0.7mを測る。
- ・上面の墳丘側の取り付け部には40cm大の基底石が配列され、それに接して有機質遺物(木製品)が出土した。
- ・上面では、中央よりやや後円部側と外堤との接続部付近において、渡り土手に直交する溝を2本検出し、墳丘との遮断を表象するものと考えられる。
- ・渡り土手斜面や周濠底から水鳥形埴輪片が出土しており、渡り土手周辺に配置されていたと考えられる。
 - 墳丘築造時の作業用通路として、墳丘と外部の往来を目的として設置されたと考えられるが、斜面の葺石や上面の礫敷、有機質遺物の出土、水鳥形埴輪の配置などから葬送儀礼用の通路としても使用されたことが推定される。

③後円部(令和元年度)

- ・後円部北側及び西側において、上段斜面・中段テラス及び斜面・下段テラス及び斜面を検出した。
- ・各斜面では葺石を、各テラス面では礫敷及び埴輪列を検出した。
- ・後円部主軸にあたる位置では、中段斜面裾部付近において大型の石材を用いた石列を確認した。
 - 後円部主軸を意識して葺石を施工
- ・後円部各部の復元寸法
 - 上段径 約66m、中段径 約85.5m、下段径 約110m
 - 中段テラス幅 約4.1m、下段テラス幅 約5.5m
 - 中段テラスに比べて下段テラスの幅が広がる。

④前方部(令和2・3年度)

- ・前方部南西側・南側・南東側において、上段斜面・中段テラス及び斜面・下段テラス及び斜面を検出した。
- ・各斜面では葺石を、各テラス面では礫敷及び埴輪列を検出した。
- ・前方部南西側においては、前方部下段の形を復元する上で定点となる下段斜面裾部の位置を確認した。
 - 西造り出し部の成果とあわせ、前方部西側の下段斜面裾ラインを復元
- ・前方部南面各部の復元寸法
 - 中段テラス幅 約4.8m、下段テラス幅 約4.1m
 - 下段テラスに比べて中段テラスの幅が広がる。

⑤西くびれ部(平成29年度)

- ・上段斜面から中段テラス及び斜面までの調査により、上段斜面及び中段テラス埴輪列から前方部と後円部が接続する西くびれ部の位置を確認した。

・上段斜面で、裾部から墳頂部へと東西にのびるくびれ部の石列を検出した。

→石列を境に南北で葺石を葺く向きが変化する。

・中段テラスで、くびれ部を示す埴輪列の屈曲を確認した。

→前方部と後円部の埴輪列の間を境にして屈曲する。

⑥東くびれ部(令和3年度)

・上段斜面から中段テラス及び斜面までの調査により、中段テラス埴輪列から前方部と後円部が接続する東くびれ部の位置を確認した。

・中段テラスで、くびれ部を示す埴輪列の屈曲を確認した。

→屈曲点に埴輪(赤色顔料を塗布した朝顔形埴輪)を設置する。

4. 久津川車塚古墳の意義

①古墳時代中期の巨大古墳の実態を知ることができる。

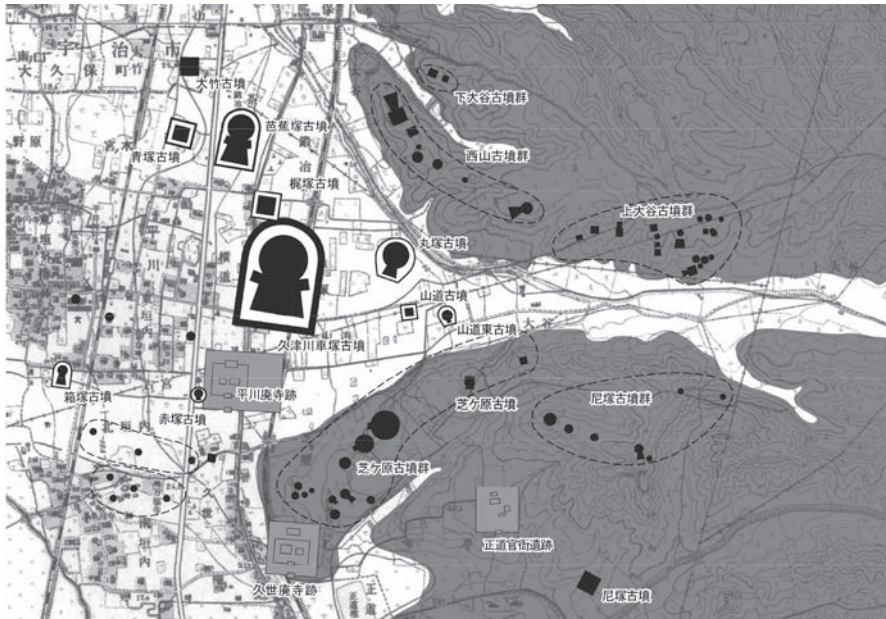
②古墳時代中期における大首長を中心とした地域支配体制を知ることができる。

③古墳時代中期におけるヤマト王権と地域の大首長の関係を知ることができる。

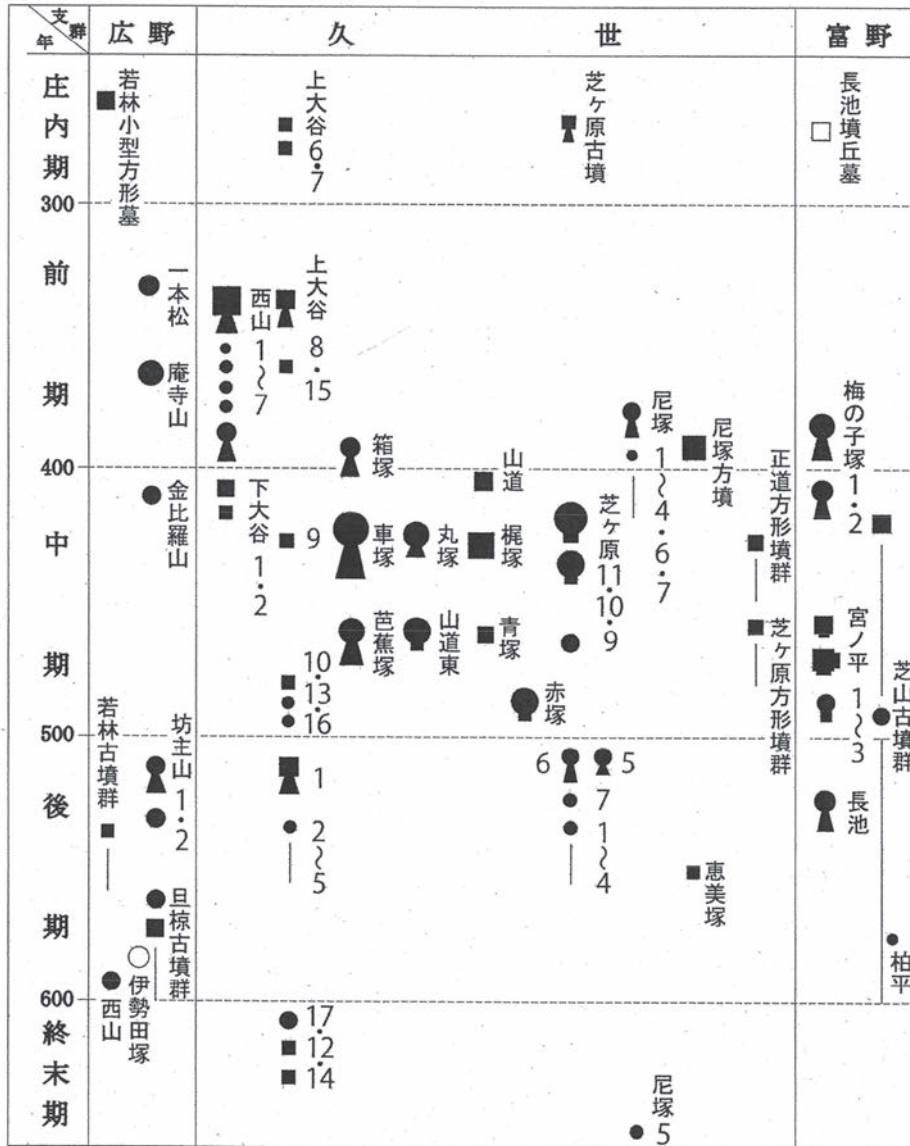
④ヤマト王権が南山城地域を重要視していたことを知ることができる。



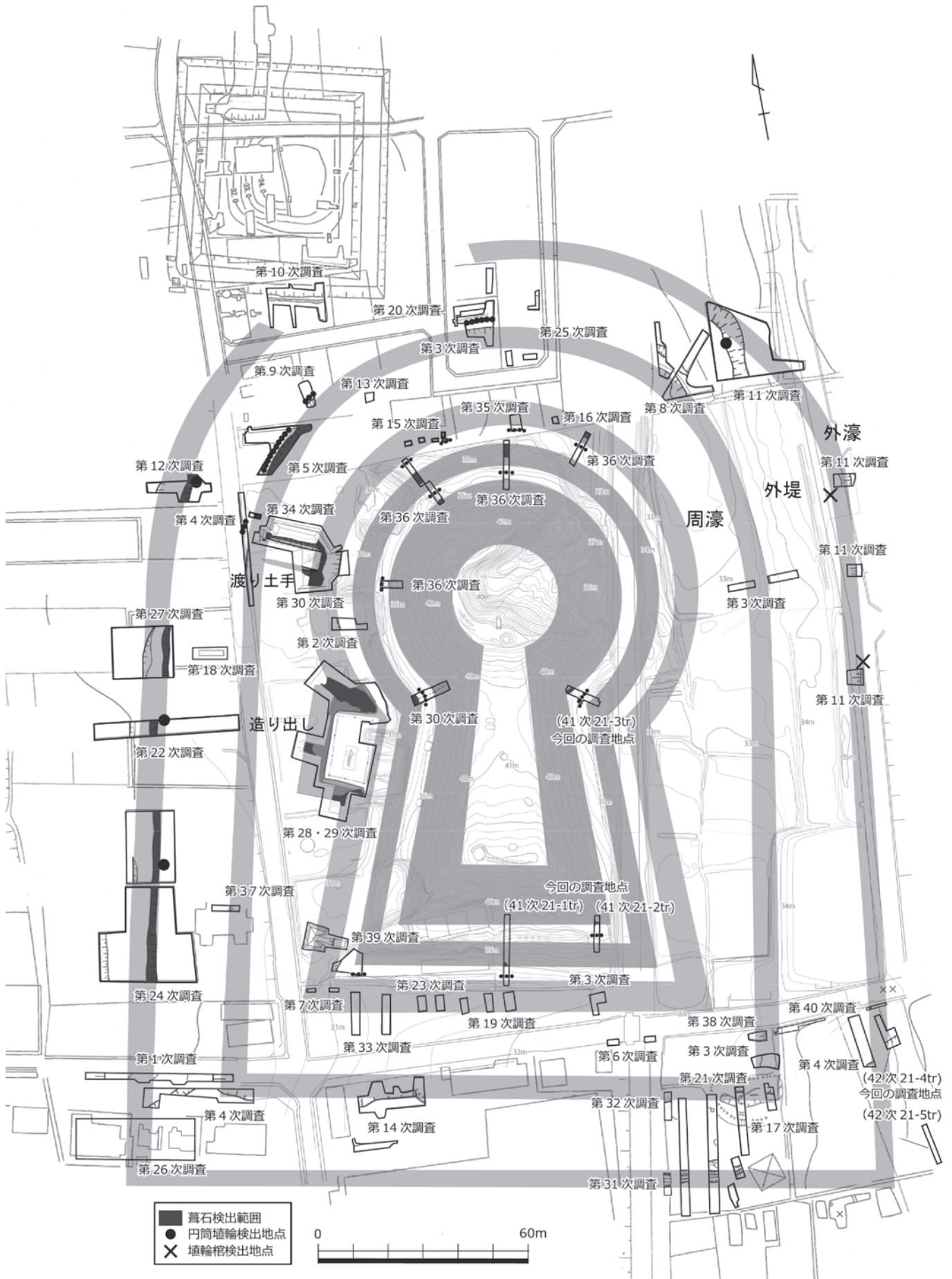
写真 久津川車塚古墳東くびれ部の調査状況



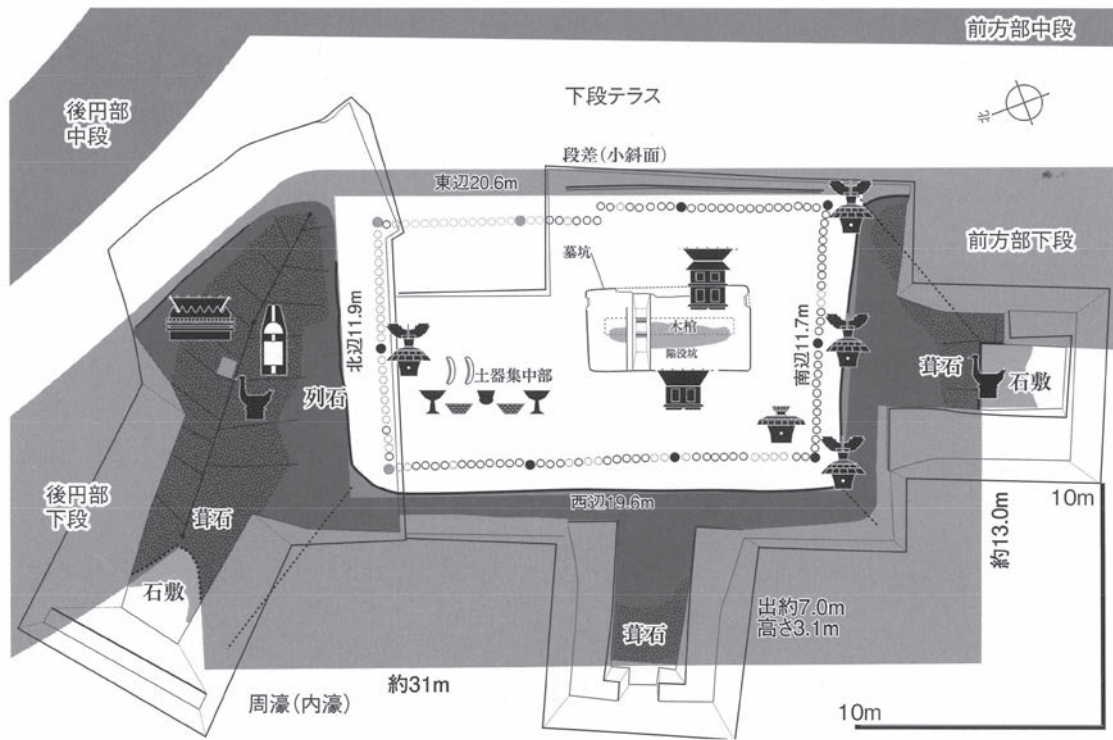
第1図 大谷川扇状地と久津川古墳群久世支群



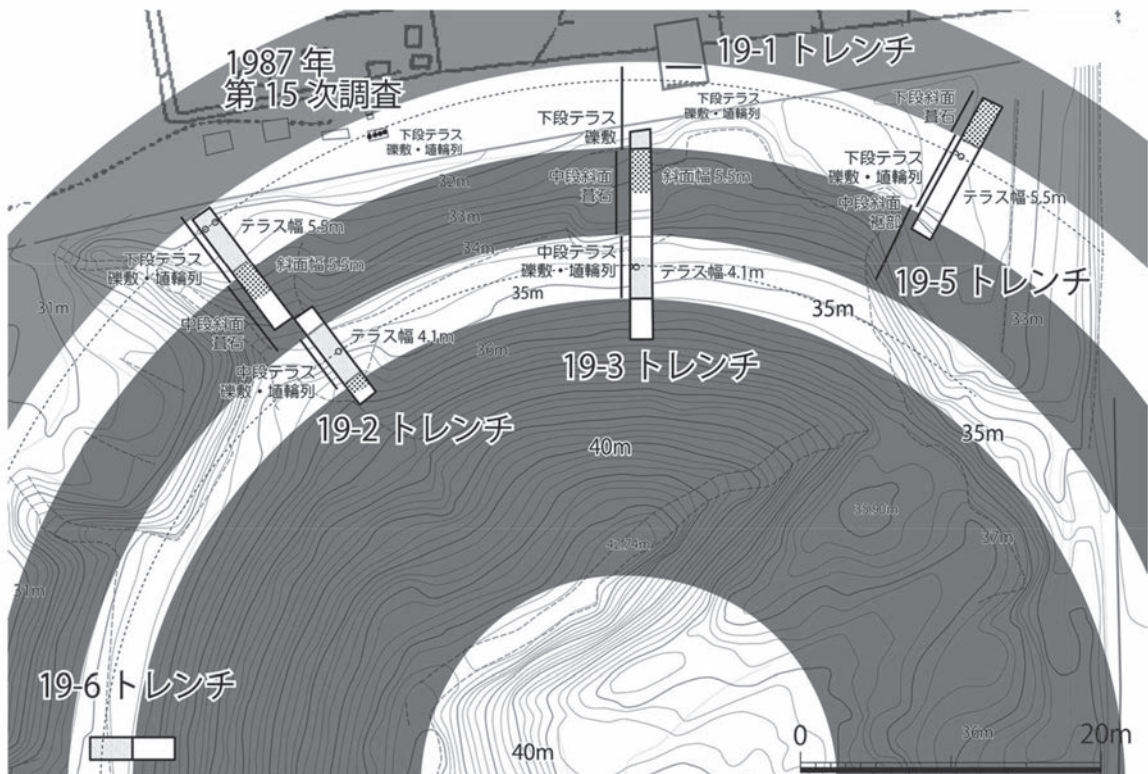
第2図 久津川古墳群変遷図



第3図 久津川車塚古墳調査区位置図



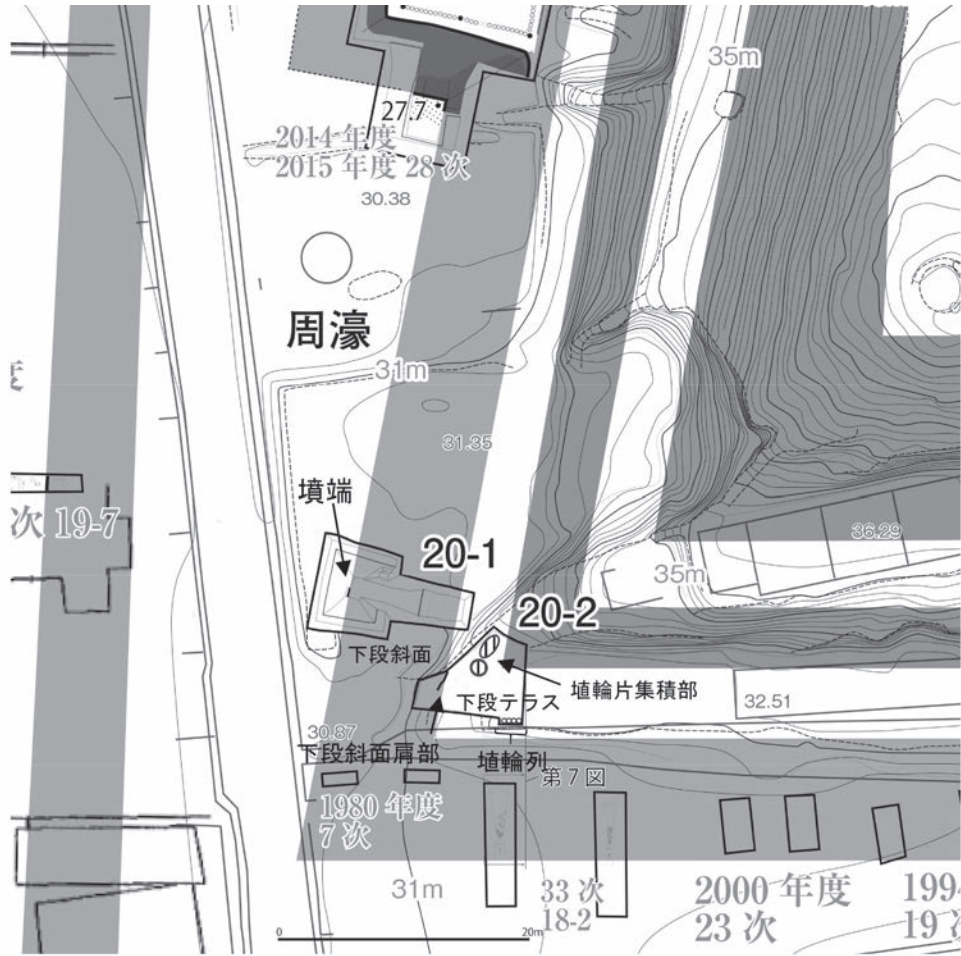
第4図 久津川車塚古墳西造り出しの発掘調査成果



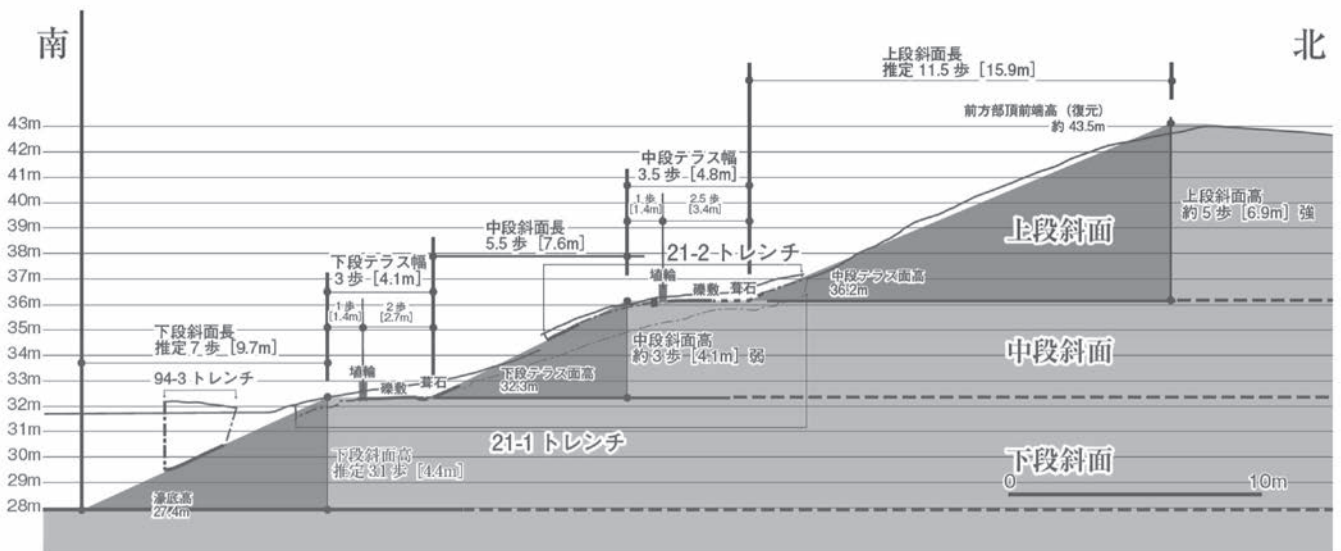
第5図 久津川車塚古墳後円部の発掘調査成果



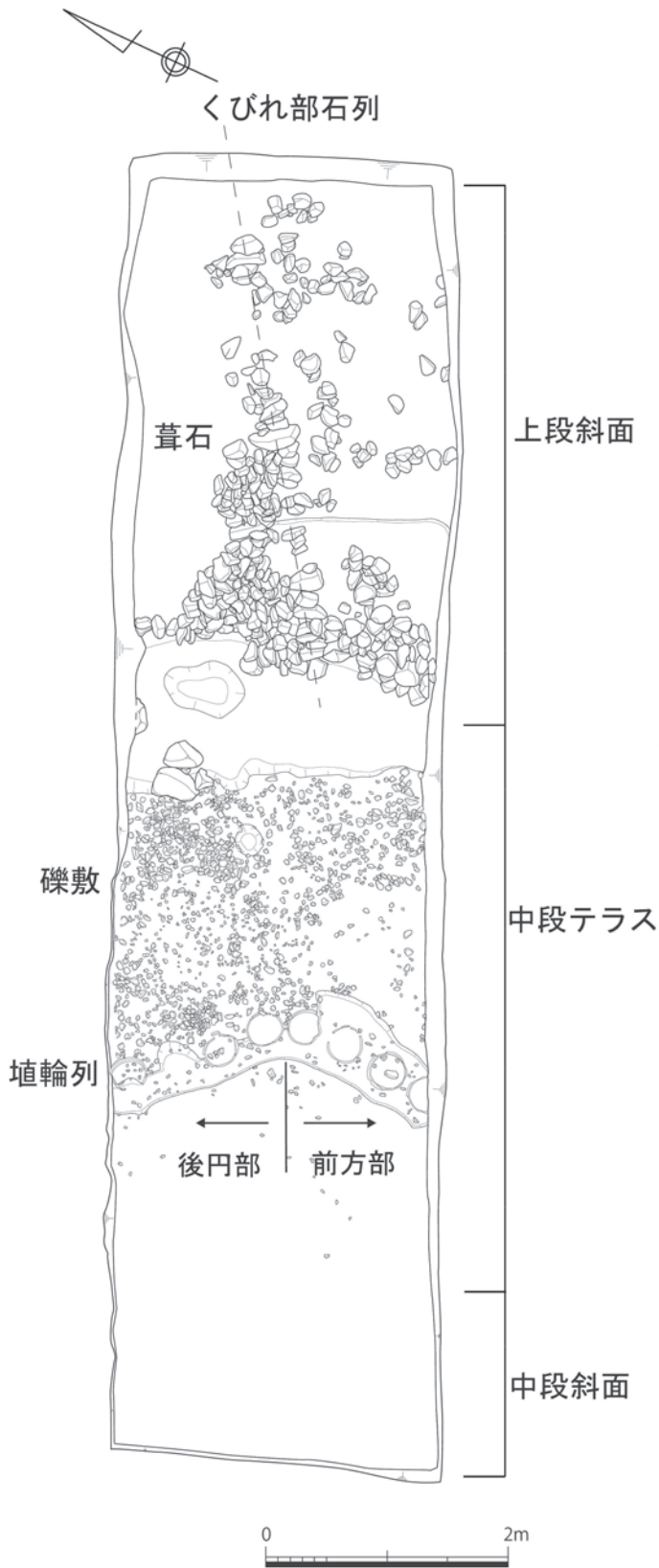
第6図 久津川車塚古墳渡り土手の発掘調査成果



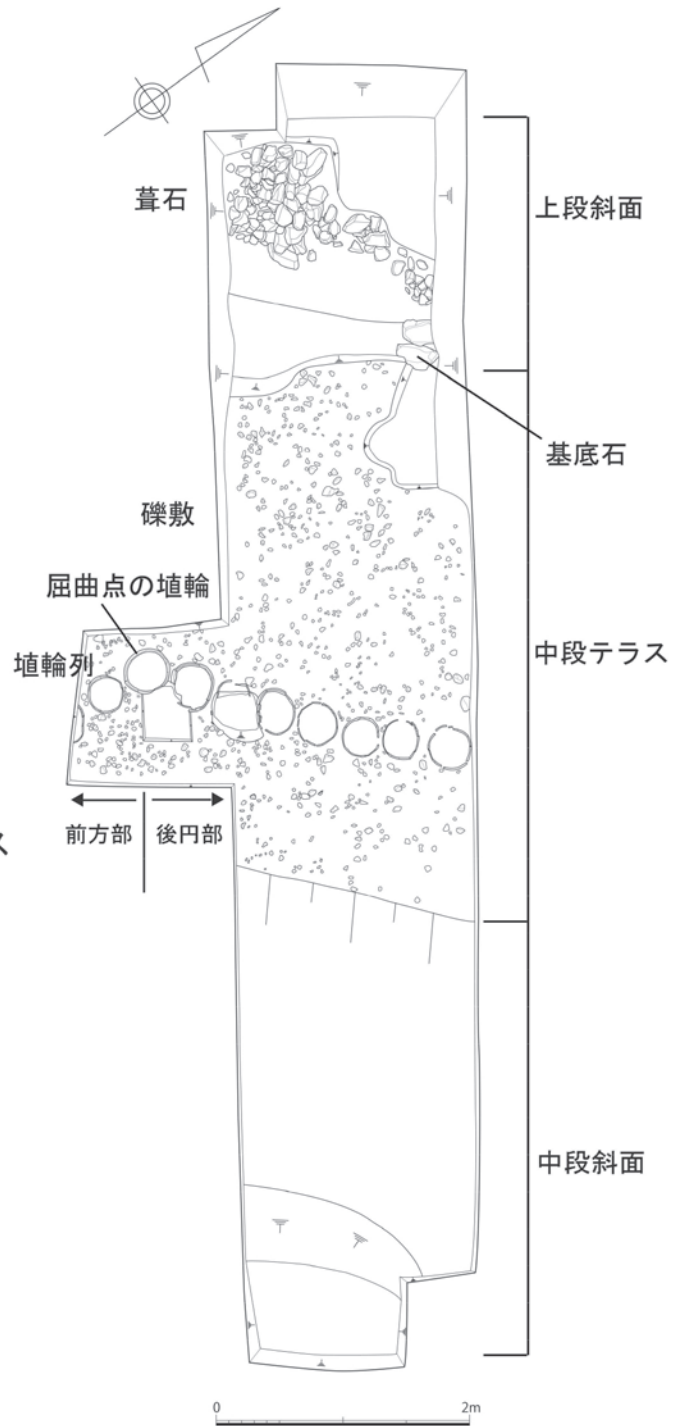
第7図 久津川車塚古墳前方部南西隅角部の復元図



第8図 久津川車塚古墳前方部南面の復元図



第9図 久津川車塚古墳西くびれ部の発掘調査成果



第10図 久津川車塚古墳東くびれ部の発掘調査成果

メモ

てんりやま 京田辺市天理山古墳群の発掘調査

京田辺市市民部文化・スポーツ振興課

上野 あさひ

1. はじめに

天理山古墳群は、とんちの一休さんでおなじみのしゅうおんあんいっきゅうじ酬恩庵一休寺の南側の丘陵にあります。古墳群が位置する丘陵は、西から東に傾斜の下がる田辺丘陵の東側にあたり、その標高は高いところで約90mになります。古墳群の北側には京都盆地、東側には山城盆地を貫流する木津川を眺めることのできる高所に位置しています(第1図、第2図)。

2. 天理山古墳群の調査

(1) 調査歴

天理山古墳群は過去に踏査が実施されています。昭和33(1958)年に田辺郷土史会(現京田辺市郷土史会)が、昭和44(1969)年に京都府による踏査が行われ、埴輪の破片や埋葬施設の一部とみられる痕跡を発見しています。田辺郷土史会が踏査した際は、1号墳と2号墳は古墳時代後期の円墳、3号墳の時期は不明としながらも円墳とされていました(田辺郷土史会1959)。発掘調査が実施されたことはなく、その実態は謎に包まれていました。

そんな中、天理山古墳群のある丘陵一帯で宅地造成の計画が出されたため、令和3年度に発掘調査を実施しました。調査は古墳の規模と墳形を明らかにすることを目的に、合計19箇所調査区を設定しました(第3図)。

(2) 1号墳の調査

丘陵尾根上のもっとも高い地点に位置します。現在は山林に覆われ、後円部西側と前方部では古墳の形が崩れている部分が認められます。5か所に調査区を設定し、全長57mの前方後円墳であることが判明しました。墳丘や墳丘の流出土中には葺石が一切含まれないことから、築造当初から葺石をもっていなかったと考えられます。後円部北側とくびれ部に設定した調査区から埴輪の破片が出土し、その時期は前期後半頃と推測されます。

(3) 2号墳の調査

過去の踏査で「1号墳の西15mの山頂部」に位置すると記述があり(田辺郷土史会1969)、

発掘調査では現地の地形と遺跡地図から2号墳と想定される部分に調査区を設定しましたが、古墳の痕跡は認められませんでした。

(4) 3号墳の調査

1号墳と同一丘陵の尾根上に位置します(1号墳の東側)。6か所に調査区を設定しました。その結果、全長81mの前方後円墳であることが判明しました。埴輪の特徴から、前期の中でも末頃の古墳であると判断できます。

葺石 墳丘斜面、平坦面から葺石を検出しました。葺石には直径約15cmの河原石が用いられ、地山を削り出した上に部分的に盛土を行い設置しています。くびれ部では墳丘と平坦面の屈曲点に長辺約20cmの基底石が設置されていました。

埴輪列 くびれ部に設定した調査区で埴輪列を検出しました(第4図・第5図)。調査区内で検出した6本の樹立埴輪のうち、4本は後円部側、1本はくびれ部、1本は前方部側で出土しました。埴輪は直径35~40cmで、0.8~1.0mの間隔で樹立しています。

埴輪棺 前方部北側裾付近に設定した調査区から、底部から横倒しになった状態の円筒埴輪を検出しました(写真2)。検出場所は墳丘の外側であり、周辺からは埴輪が出土していないことから、埴輪棺であることが想定されます。

(5) 4号墳の調査

1号墳と3号墳が立地する尾根から谷を挟んで北側にあります。4号墳は全体が竹林で覆われていますが、墳丘に目立った損壊はなく、良好な遺存状態を保っています。5箇所を設定した調査区のうち、墳頂部では墓壙^{ぼこう}の輪郭、その内側の一部分で水銀朱を検出しました。現地の地形と測量図から前方後方墳と判断することができ、その規模は全長42mを測ります。墳頂部では土師器の破片が出土し、前期中頃と位置付けられます。

(6) 小 結

1号墳、3号墳は前方後円墳、4号墳は前方後方墳で、すべて丘陵の地山を削って古墳の形を造っていることが分かりました。3基の古墳はその築造方法に大きな差はありませんが、出土遺物や外表施設から造られた時期には少し差があり、4号墳がもっとも古く、1号墳、3号墳と続くと考えられます。

3. 周辺の遺跡

天理山古墳群の周辺にみられるいくつかの遺跡をご紹介します。

古墳群の北側には東西約1km、南北約0.8kmの範囲に薪遺跡^{たきぎ}(縄文時代~近世)が広がっています。薪遺跡の中には複数の埋没古墳が発見されており、いずれも天理山古墳群よりも後出する古墳(古墳時代中期:西暦450~500年ごろ)であることがわかっています。

また天理山古墳群の西側には堀切古墳群、南側の丘陵裾部分には小欠古墳群^{おがき}などの後期の古墳群(西暦550年ごろ)がみられます。このように天理山古墳群の周辺には古墳時代を通して人々の活発な動きがあったことが推測できます。

4. 木津川左岸域の古墳(第6図)

京田辺市内の古墳に注目すると、天理山古墳群と同時期の古墳が多く見られます。
飯岡車塚古墳^{いのおかくるまづか}(前方後円墳 87m)や大住車塚古墳^{おおすみ}(前方後方墳 66m)、大住南塚古墳(前方後方墳 71m)、また石製品が多数出土したことで有名な興戸^{こうど}2号墳(円墳 28m)などが挙げられます。

このような前期古墳の活発な造営に対して、古墳時代中期に入ると古墳の数とその規模は一気に縮小し、ほとんどの古墳は円墳または方墳になります(薪高木1号墳・興戸塚ノ本古墳など)。このような特徴は八幡市の古墳にもみられます。

このように前期末から中期に入るタイミングには古墳が造られる数やその大きさに明らかな変化がみてとれます。このような動向は他地域にも認められ、当時の王権が支配の強化を図るために起こった動きと評価されています(和田1988・2018)。

京田辺市から八幡市にかけての古墳は、上述のとおり似ている特徴があることが指摘されてきましたが、古墳群として一体的な評価には至っていませんでした。しかし天理山古墳群の発掘調査により、木津川左岸域に点在する前期古墳について、「綴喜古墳群」としてひとまとまりの古墳群として評価することができるようになりました。

5. おわりに

今回の発掘調査により、従来考えられていた天理山古墳群の評価は大きく変わり、宅地造成計画は中止になりました。市では今後整備に向けた取り組みを進める計画です。

今回の調査では、古墳の規模と墳形を確認するための必要最低限の調査場所に限られたため、今後も引き続き調査を進め、古墳群の性格をより明らかにしていく必要があります。

《参考文献》

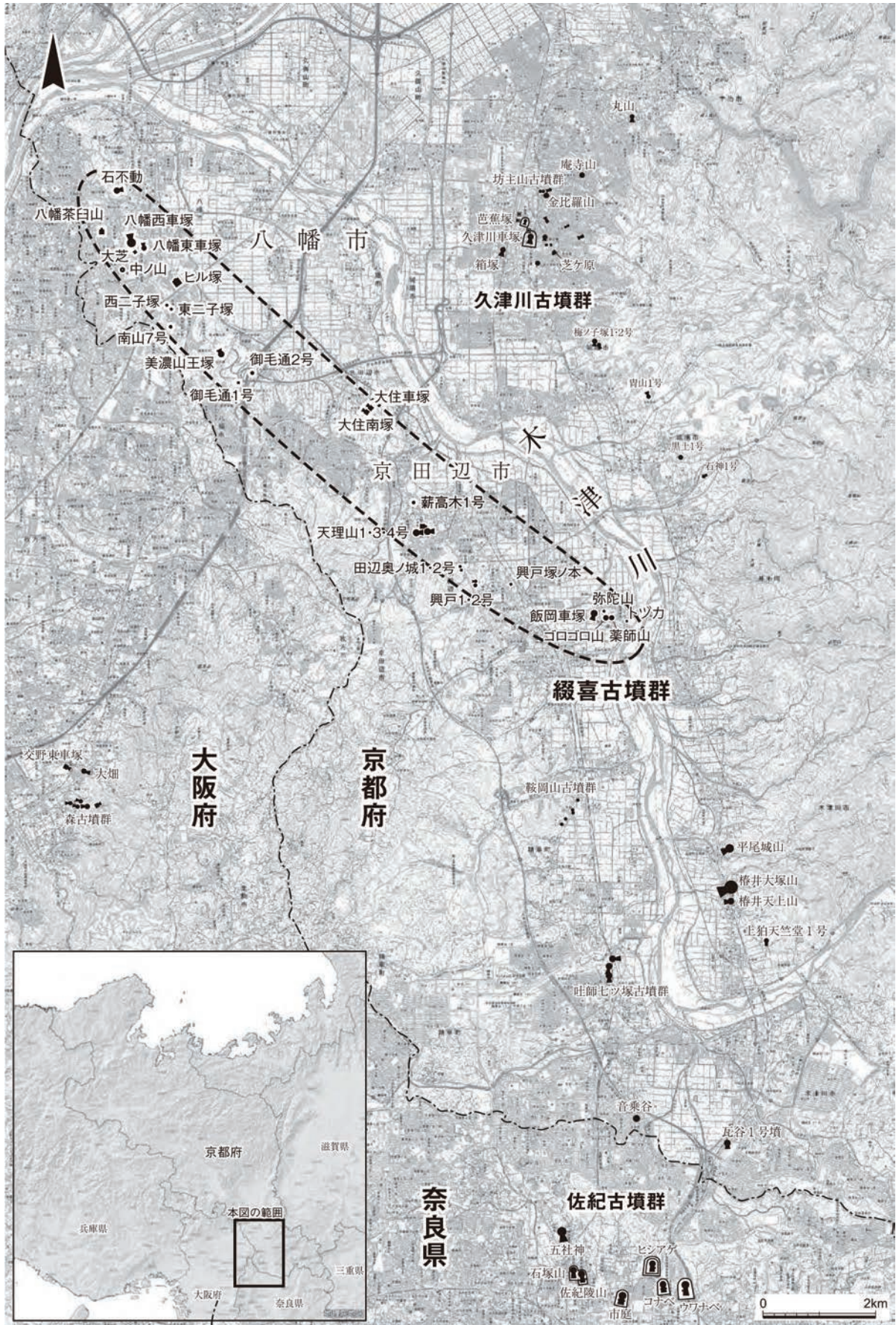
京田辺市2022『天理山古墳群発掘調査報告書』

京都府教育委員会2022『綴喜古墳群調査報告書』

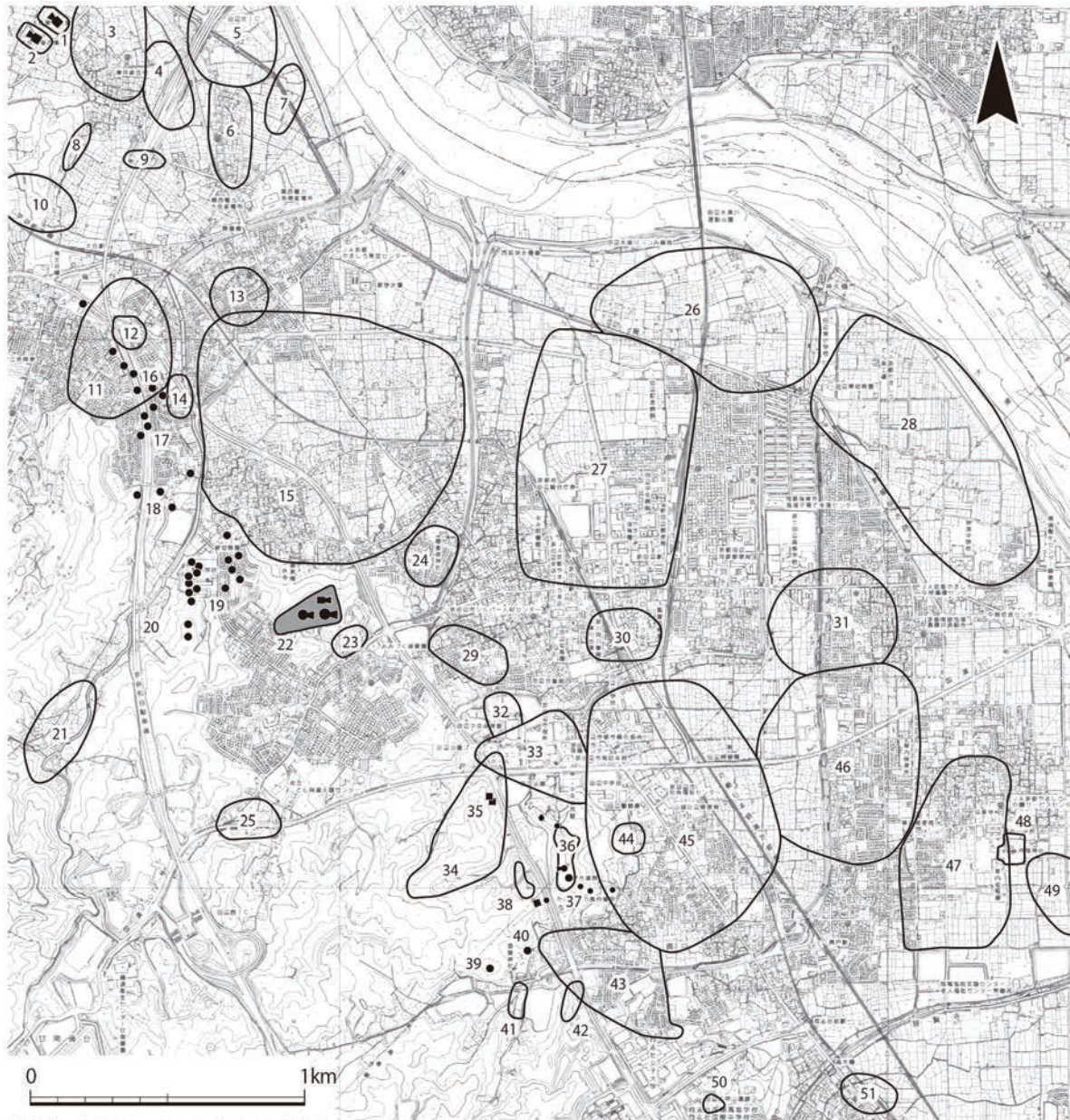
田辺郷土史会1959『田辺町郷土史古代篇』

和田晴吾1988「南山城の古墳—その概要と現状—」『京都地域史研究』4 立命館大学人文科学研究所

和田晴吾2018『古墳時代の王権と集団関係』吉川弘文館



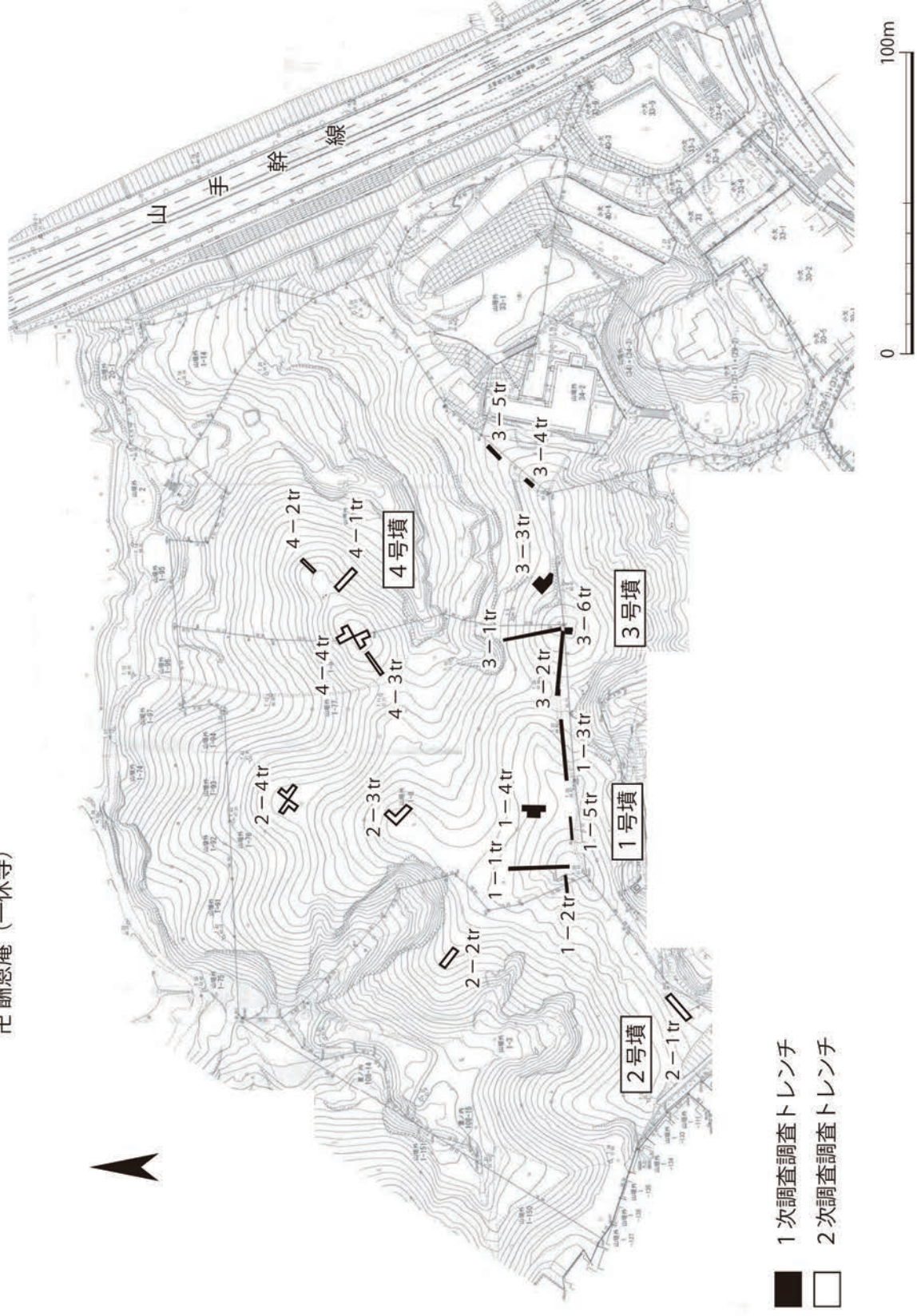
第1図 綴喜古墳群の位置 (S = 1 / 100,000) (京都府教育委員会2022)



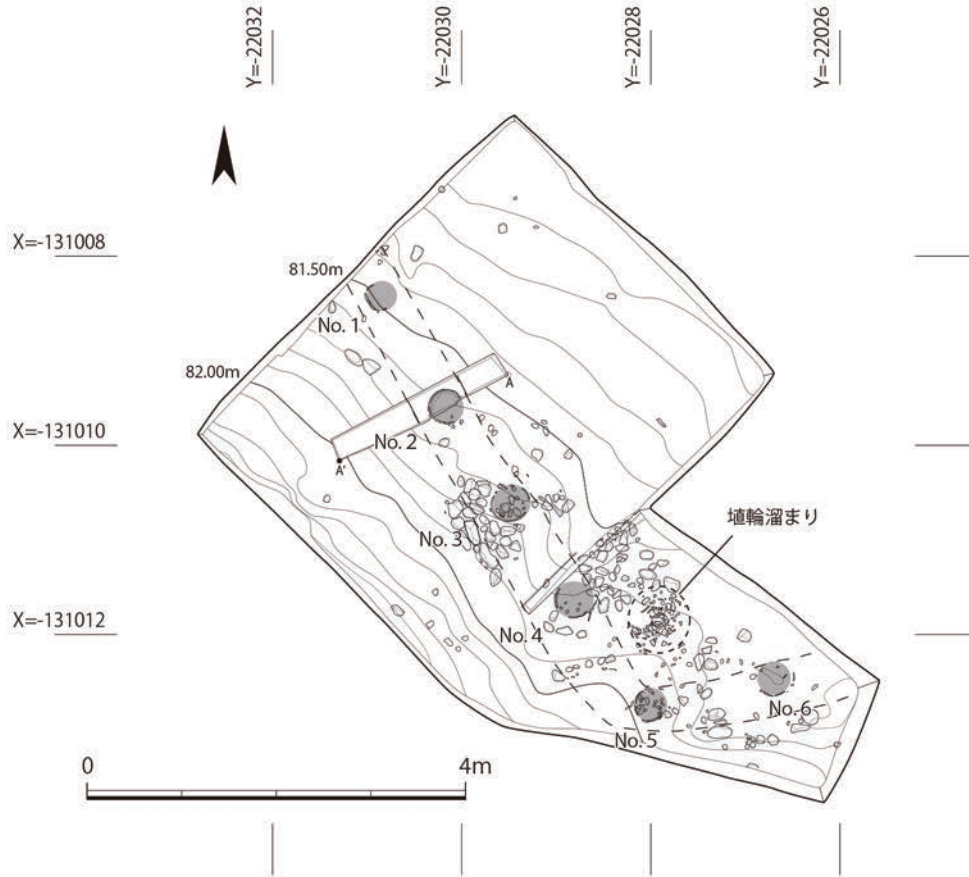
- | | | | |
|----------|------------------|-------------|------------|
| 1 大住車塚古墳 | 14 畑山遺跡 | 27 稲葉遺跡 | 40 興戸宮ノ前窯跡 |
| 2 大住南塚古墳 | 15 薪遺跡 | 28 東神屋遺跡 | 41 川原谷遺跡 |
| 3 岡村遺跡 | 16 郷土塚古墳群 | 29 尼ヶ池遺跡 | 42 興戸城跡 |
| 4 久保田遺跡 | 17 畑山古墳群 | 30 河原遺跡 | 43 興戸宮ノ前遺跡 |
| 5 三本木遺跡 | 18 西山古墳群 | 31 鍵田遺跡 | 44 興戸廃寺 |
| 6 三野遺跡 | 19 堀切古墳群 | 32 竹ノ脇遺跡 | 45 興戸遺跡 |
| 7 志保遺跡 | 20 西薪遺跡 | 33 田辺遺跡 | 46 大切遺跡 |
| 8 塔ノ脇遺跡 | 21 城ヶ前遺跡 | 34 田辺城跡 | 47 南垣内遺跡 |
| 9 野上遺跡 | 22 天理山古墳群 | 35 田辺奥ノ城古墳群 | 48 草路城跡 |
| 10 地内山遺跡 | 23 小欠古墳群 | 36 興戸丘陵東遺跡 | 49 宮ノ後遺跡 |
| 11 狼谷遺跡 | 24 棚倉孫神社遺跡 | 37 興戸古墳群 | 50 田辺天神山遺跡 |
| 12 小林遺 | 25 茂ヶ谷遺跡 | 38 興戸丘陵西遺跡 | 51 野神遺跡 |
| 13 薪城跡跡 | 26 伝道林遺跡 | 39 酒壺古墳 | |

第2図 天理山古墳群周辺の遺跡(S = 1/25,000)(京田辺市2022)

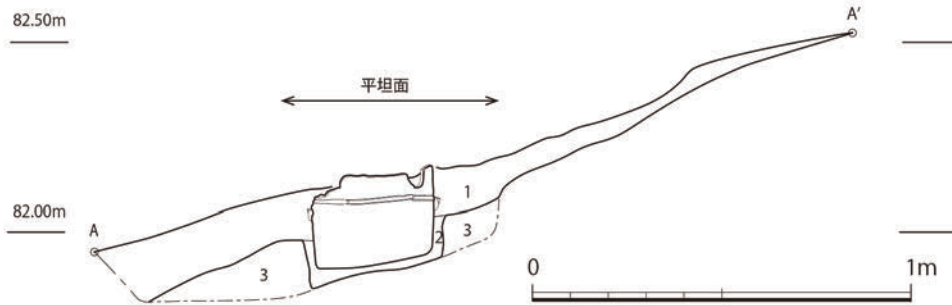
祀 酬恩庵 (一休寺)



第3図 天理山古墳群全体図(S = 1 / 2,000)(京田辺市2022)



第4図 3号墳3-3tr検出埴輪列平面図(S = 1/80)



- | | | | | | |
|---|----------|--------|---------|----------|------------------|
| 1 | 2.5YR5/6 | にぶい黄褐色 | 細粒砂 | 流土 | Ø~3cmの礫、埴輪片を多く含む |
| 2 | 10YR6/6 | 明黄褐色 | 中粒砂混細粒砂 | 埴輪据付痕跡埋土 | |
| 3 | 10YR5/8 | 黄褐色 | 細粒砂 | 地山 | しまり良 |

第5図 3号墳3-3tr検出埴輪(N o.2)断面図(S = 1/20)



写真1 3号墳検出埴輪(N o.2)



写真2 3号墳検出埴輪棺

城陽市小樋尻遺跡の発掘調査

(公財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

小泉裕司

1. はじめに

小樋尻遺跡は、城陽市のほぼ中央部の木津川右岸に位置し、木津川により形成された沖積平野に立地します。東側には南北にのびる宇治丘陵から西に派生する芝山丘陵^{しばやま}があり、この丘陵上には縄文時代から中世の複合遺跡である芝山遺跡や縄文時代後期と古墳時代前期の集落跡である森山遺跡、古墳時代前期の梅の子塚古墳群、前期末から後期に築造された芝山古墳群が所在します。また西側の沖積平野には縄文時代から中世の複合遺跡である水主神社東遺跡^{みぬしじんじゃ}や下水主遺跡^{しもみずし}などがあります。

小樋尻遺跡は、平成8(1996)年に城陽市教育委員会が実施した分布調査で初めて確認され、平成29(2017)年の京都府教育委員会の試掘調査により西側への広がりが確認されました。遺跡範囲は、東西約1,100m・南北約320mです。

平成12・13(2000・2001)年には今池川改修工事に伴う試掘・発掘調査、平成28(2016)年には関西電力株式会社の送電用鉄塔の移設に伴う発掘調査、平成29年には城陽市消防本部庁舎移設新築に伴う発掘調査が城陽市教育委員会(以下市教委と略称表記)により実施されました。また、この年から当京都府埋蔵文化財調査研究センター(以下府埋文センターと略称表記)による新名神高速道路建設と国道24号線拡幅に伴う発掘調査が実施されています。

これらの発掘調査では、縄文時代後期～晩期の自然流路、縄文時代晩期の竪穴建物や土器棺、古墳時代前期の集落や自然流路に設けられた導水施設、古墳時代後期の集落、古墳時代後期～奈良時代の大規模な溝、奈良時代の集落、古墳時代前期・古墳時代後期・飛鳥時代・奈良時代の小規模な溝群、中世の島畑群や井戸・掘立柱建物が確認されています。

2. 小樋尻遺跡の主な遺構

(1) 縄文時代

① 縄文時代後期～晩期の自然流路(第2図A地点：府埋文センターの調査)

遺跡範囲北辺のほぼ中央で検出された南東から北西にのびる大きく蛇行する自然(氾濫)

流路(第3図上段自然流路1)です。最大幅が約25m、深さが約3mあり、約45m分が検出されました。また、南西方向から合流する自然流路(第3図自然流路2)も検出されました。

自然流路からは縄文土器が出土し、上層で出土した土器から縄文時代晩期に埋没したと考えられます。

②縄文時代晩期の竪穴建物(第2図B地点:市教委の調査)

推定直径約4.7mの円形の竪穴建物で、古墳時代や中世の溝に削平されていましたが、周壁溝と柱穴を検出しました(第4図)。建物内からは縄文時代晩期の土器やサヌカイト製の石鏃が出土しました。

③縄文時代晩期の土器棺(第2図B地点ほか)

縄文時代晩期の深鉢を埋納した遺構が2か所で検出されています。ひとつは、B地点で検出された竪穴建物から南東に約30mの所で底部を南にして横向きに据えられていました。底部と底面側となっていた体部の約3分の1が遺存していました。もうひとつは、旧城陽警察署から西へ約100m、B地点から北西へ約350mの所で口縁部を東にして横向きに据えられていました。これらは、深鉢を利用した土器棺と考えられます。

(2)古墳時代

①古墳時代前期の集落(第2図B地点)

建替えにより重複するものも含めて竪穴建物14棟と、総柱の掘立柱建物1棟が検出されました(第4図)。竪穴建物は隅丸方形で、一辺が4.2~5.4mあり、周壁溝と柱穴を伴っています。竪穴建物は、3つのグループに分かれており、各グループとも調査地外に広がっていることから正確な棟数はわかりませんが、1グループ3~5棟程度で構成されていたと考えられます。また竪穴建物は、1棟を除き正方位に主軸を向けて建てられていました。

掘立柱建物は、梁行2間・桁行3間の総柱の建物で、主軸が北からやや西に振って建てられていました。竪穴建物からやや離れて単独で位置することから、収穫された作物などを保管する共有の倉庫ではないかと考えられます。

②古墳時代前期の導水施設など祭祀の場を伴う自然流路(第2図A地点)

縄文時代後期~晩期の自然流路(氾濫流路)とほぼ重なるやや蛇行する自然流路です(第3図中段)。幅約25m・深さ約2.7mを測り、約45m分が検出されました。流路の両岸は、法面に草本類を敷き造成土を強化した敷葉工法しきばによって構築されており、杭列で補強されていました。流路内には、水流を調整する堰せきも設置されていました。

西岸では、堰板(長さ約1.8m、幅約56cm、厚さ約5~8cm)で水を止め、上澄みの浄水を木樋(長さ約2.5m、幅約35cm、厚さ5~6cm)に流して祭祀を行う導水施設が検出されました。導水施設の周辺からは、漆塗りの盾や桃種など祭祀に用いられたと考えられる遺

物が出土しました。また導水施設北側の西岸には土器の集積がみられ、導水施設で行われていた祭祀に関連するものと考えられます。

流路内からは多くの土師器の他に、滑石製勾玉、琴・盤・案・腰掛・槽・櫛などの木製品、鍬や鋤・鎌柄などの木製農具が出土しました。

③古墳時代後期の集落(第2図B地点、C地点：府埋文センターの調査)

B地点の調査では、建替えにより重複するものも含めて9棟の竪穴建物が検出されました(第4図)。竪穴建物は隅丸方形で、一辺が4.0~5.5mあり、周壁溝と柱穴を伴っています。若干のばらつきがありますが、北西から南東の方位で建てられていました。竪穴建物は、南北2つのグループに分かれており、両グループとも調査地外に広がっていることから正確な棟数はわかりませんが、1グループ3~5棟程度で構成されていたと考えられます。北側のグループでは造り付けのカマドを検出しましたが、南側のグループでは検出されないことから、南側のグループは作業場などとして使用されていた可能性があります。

また、B地点から北東へ約300mのC地点で、重複する2棟の竪穴建物が検出されました。竪穴建物は一辺が約4mのものの一辺が約3mのものがあり、規模をやや縮小して建て直されたと考えられます。カマドや周壁溝、柱穴は検出されませんでした。B地点の竪穴建物と同様に北西から南東の方位で建てられていました。

④古墳時代後期~奈良時代の溝(第2図A地点)

古墳時代前期の導水施設など祭祀の場を伴う自然流路をほぼ直線状に改修した溝(第3図下段)です。幅が約11m、深さが約1.8mあり、約43m分が検出されました。溝の両岸は造成土で補強され、さらに東岸の一部は杭列で、西岸の一部は敷葉工法で護岸を補強していました。溝内には、水位を調整する堰が設置されていました。埋土からは、古墳時代後期や奈良時代の須恵器の他に斎串いぐしや人形ひとがたなどの木製品が出土しました。出土遺物から古墳時代後期から奈良時代にかけて複数回にわたり改修を行い、使用され続けていたと考えられます。

(3)奈良時代

①奈良時代の集落(第2図B地点、C地点)

B地点では少なくとも3棟の掘立柱建物が検出されました。全体が分かるのは梁行2間・桁行2間の総柱の掘立柱建物1棟ですが、これを含めて3棟の掘立柱建物が検出されました。この周囲では建物としてまとまらない多数の柱穴が検出されており、他にも複数の掘立柱建物があったと考えられます。

また、C地点で、1棟の掘立柱建物(梁行2間・桁行1間以上)が検出されました。

(4) 中世

① 島畑(新名神高速道路建設と国道24号拡幅の調査：府埋文センターの調査、B地点)

東西に細長く調査を行った府埋文センターの調査地では、遺跡範囲西端の近鉄京都線から旧城陽警察署の西側まで連綿と島畑が検出されました(第2図に範囲を明示)。検出された島畑は、すべて南北方向に細長いものでした。旧城陽警察署跡地の東側では全く検出されず、今池川改修の調査地や関西電力鉄塔移設の調査地でも島畑は検出されていません。一方、B地点では第4図には示していませんが東西方向の島畑が検出されています。

② 井戸(第2図A地点西側、B地点)

井戸は、A地点の西側の調査区で、円形素掘り井戸3基(径2.4m・深さ1.6m、径2.5m・深さ1.8m、径4.2m・深さ2.6m)を検出しました。そのうちの1基(径2.4m・深さ1.6m)は底面中央に曲物が据えられ、最も大きい井戸(径4.2m・深さ2.6m)からは完形の瓦器や土師器が出土しています。

また、B地点でも円形素掘り井戸1基(径1.8m・深さ0.8m)を検出しており、底面に曲物が据えられていました。

③ 掘立柱建物(府埋文センターの調査)

旧城陽警察署西側で掘立柱建物1棟が検出されました。梁行2間・桁行3間の総柱の掘立柱建物で、東西南北の正方位で建てられていました。

3. まとめ

A地点で確認した自然流路は、縄文時代後期に木津川の氾濫により開削され、縄文時代晩期後葉にかけ木津川の氾濫などにより徐々に埋没していったようです。自然流路内に堆積した木材などから、周辺は森林であったと考えられます。自然流路や森林を縄文人が活動範囲としていたことが、出土した縄文土器から推察されます。

縄文時代晩期には、木津川の自然堤防と考えられる微高地上(A地点)に集落が営まれ、土地利用が始まります。しかし、弥生時代の遺構は後述する流路以外にみつかっておらず、弥生時代には土地利用は行われていなかったと考えられます。

古墳時代前期に再び微高地上(C地点)に集落が営まれるとともに、耕作地として低地の土地利用が始まります。

A地点で見つかった縄文時代の自然流路は、弥生時代中期に木津川の氾濫により再び開削され、古墳時代前期にも存続していたようです。護岸を敷葉工法や杭列で補強し、導水施設を用いた水の祭祀場として利用されます。小樋尻遺跡の東側にある芝山丘陵上には、古墳時代前期の有力首長の居館跡と考えられる森山遺跡や同時期の有力首長墓である梅の

子塚1・2号墳があります。導水施設を用いた水の祭祀は、ヤマト王権が行う重要な祭祀と考えられています。今回みつかった導水施設は、森山遺跡の居館跡や梅の子塚1・2号墳とともに、この地にヤマト王権と深いつながりを持った有力首長が存在したことを示す貴重な資料です。

古墳時代中期の遺構はみつかっておらず、集落や耕作地としての土地利用が一旦中断するようです。

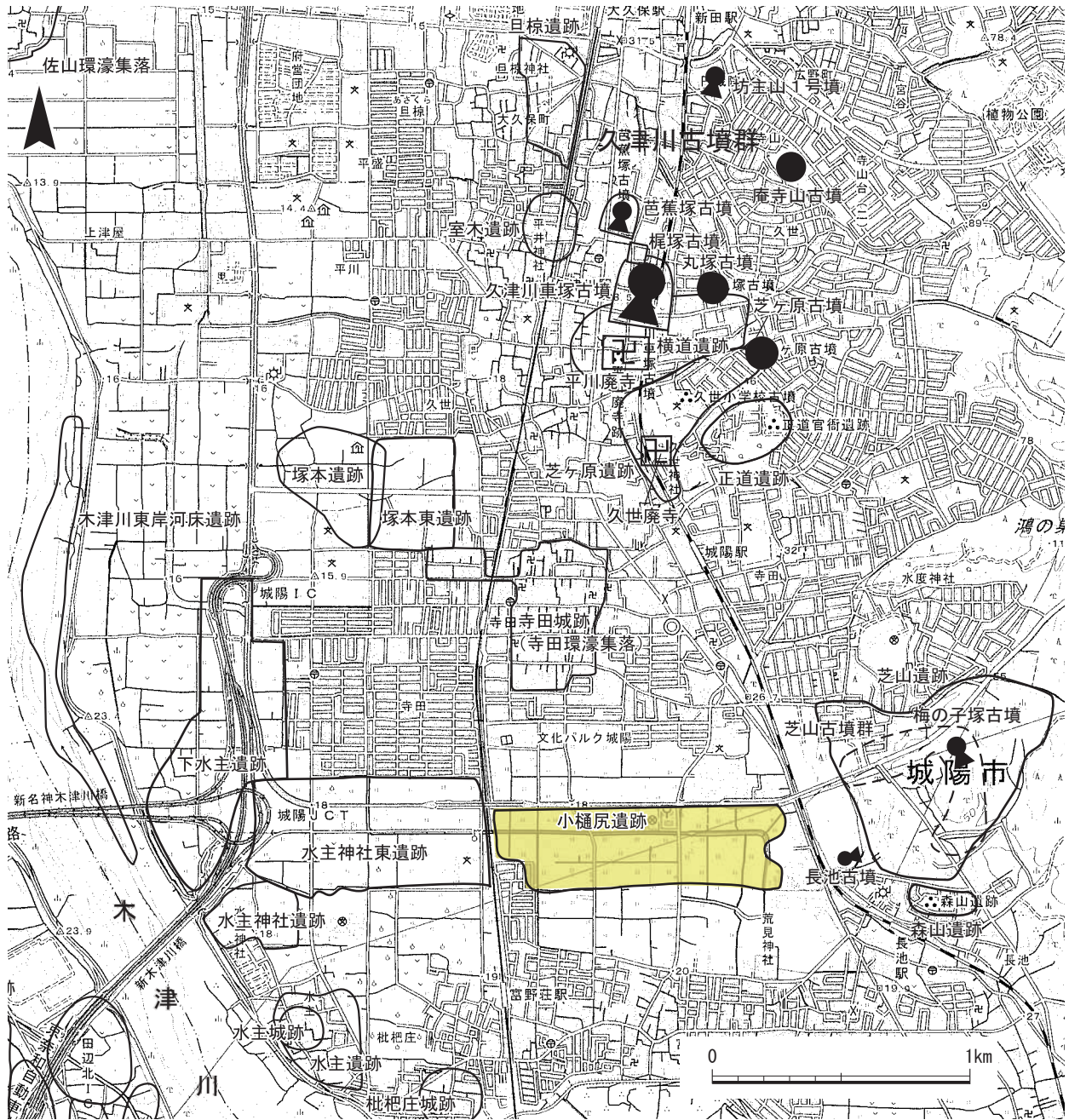
古墳時代後期には再び微高地上(B地点、C地点)に集落が営なまれ、耕作地として低地の利用が行われます。古墳時代後期には東側の低丘陵上(正道遺跡・芝ヶ原遺跡)や扇状地上(室木遺跡)にも集落が営まれ始めており、この時期に多くの人々が生活していたと考えられます。また、水の祭祀などが行われていたA地点の自然流路はこの時期にも存続していたようで、大規模な改修工事を行い水路として利用されたと考えられます。

飛鳥時代にも引き続き耕作地として利用されていたことが予想されますが、集落はみつかっていません。東側の芝山丘陵上に新たに集落(芝山遺跡)が出現することから、平地から丘陵へ集落が移動した可能性もあります。

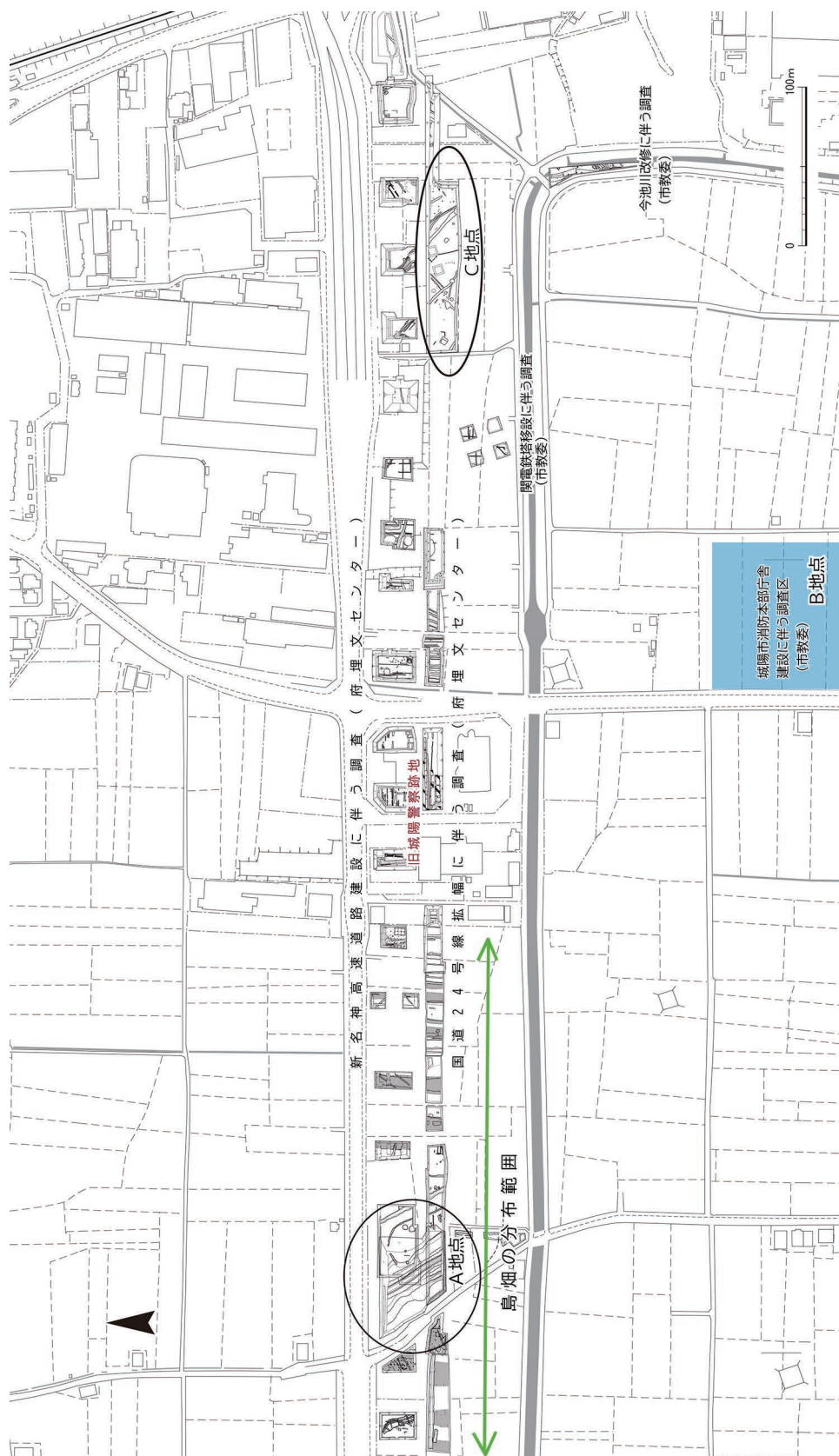
奈良時代には、再び微高地上(B地点、C地点)に集落が営まれます。また古墳時代後期に改修された溝は、奈良時代まで水路として維持管理されながら使用されています。『日本書紀』には、現在の宇治市南部から城陽市北部の木津川右岸に、仁徳朝と推古朝にくりくまのおおうなで「栗隈大溝」が掘削されたとの記載があります。今回みつかった溝は、出土遺物から推古朝の「栗隈大溝」との関連が指摘されています。

中世には多数の島畑が営まれます。府埋文センター調査地である遺跡範囲の中央では南北方向の島畑に統一されていますが、遺跡範囲の南東部分にあたるB地点では東西方向の島畑となっています。また旧城陽警察署跡地の東側では島畑はみつかっていません。旧城陽警察署跡地から東側の遺跡範囲の北東部分は、微高地を除いて湿潤な低湿地状となっていたことから、島畑を造営しなかったのではないかと考えられます。

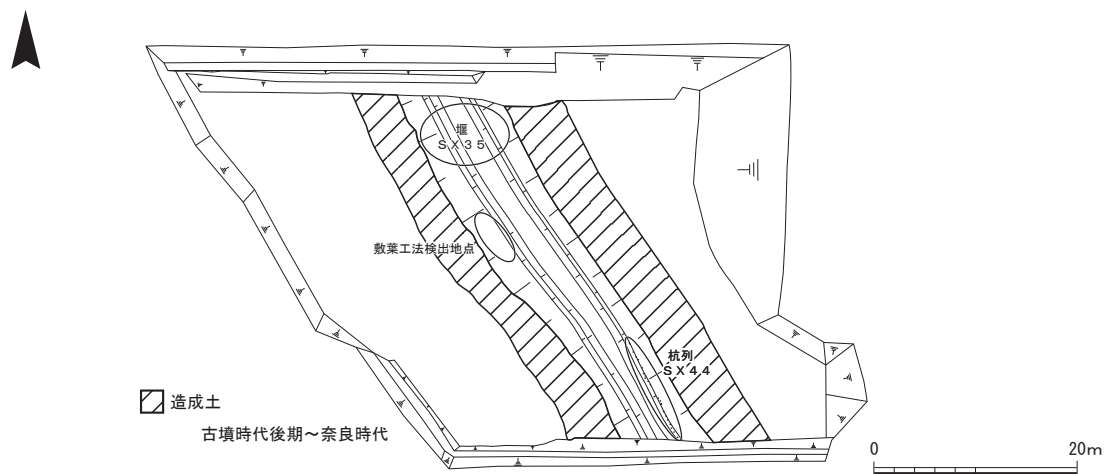
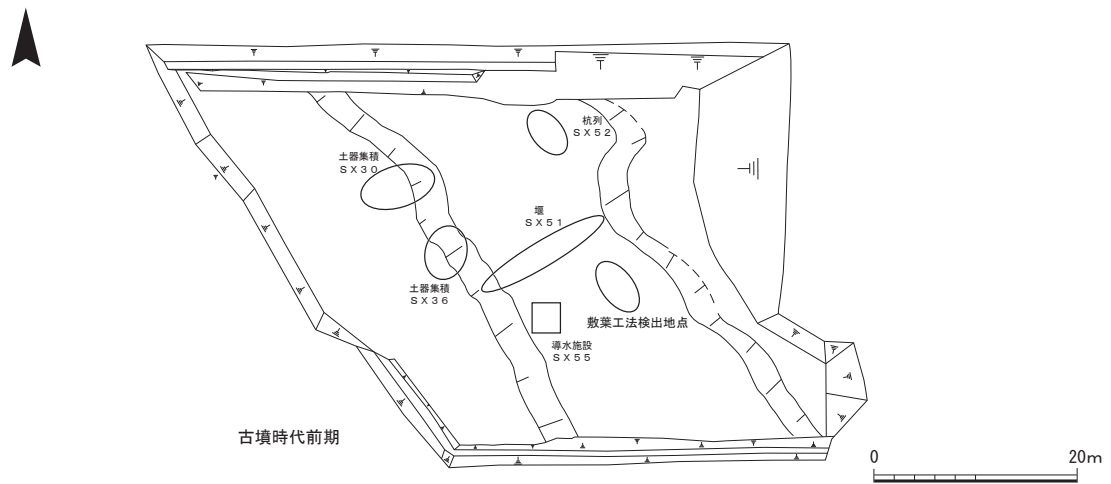
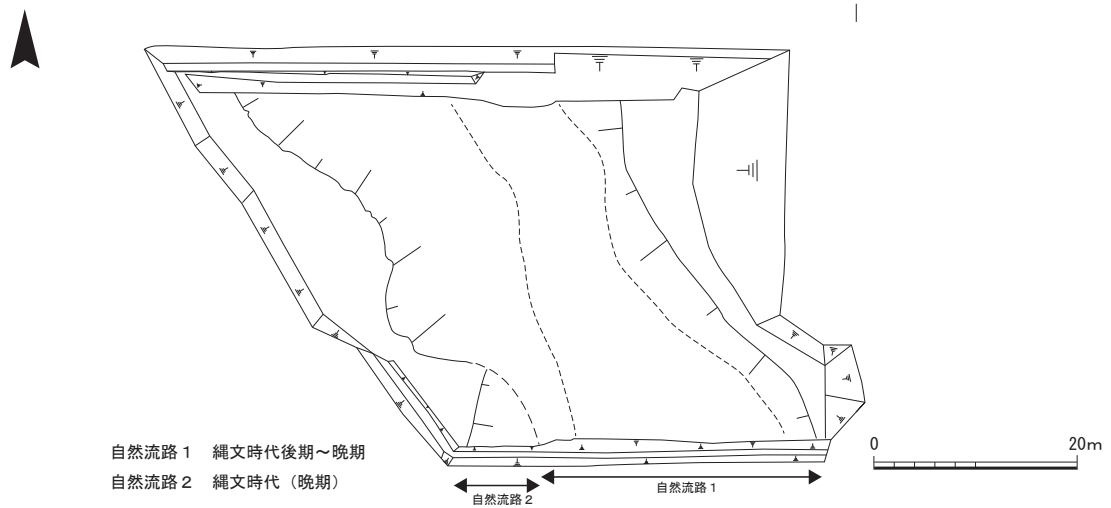
小樋尻遺跡の調査により、城陽市域の平野部における縄文時代後期から中世の各時代の人々の営みや土地利用を知る貴重な資料を得ることができました。



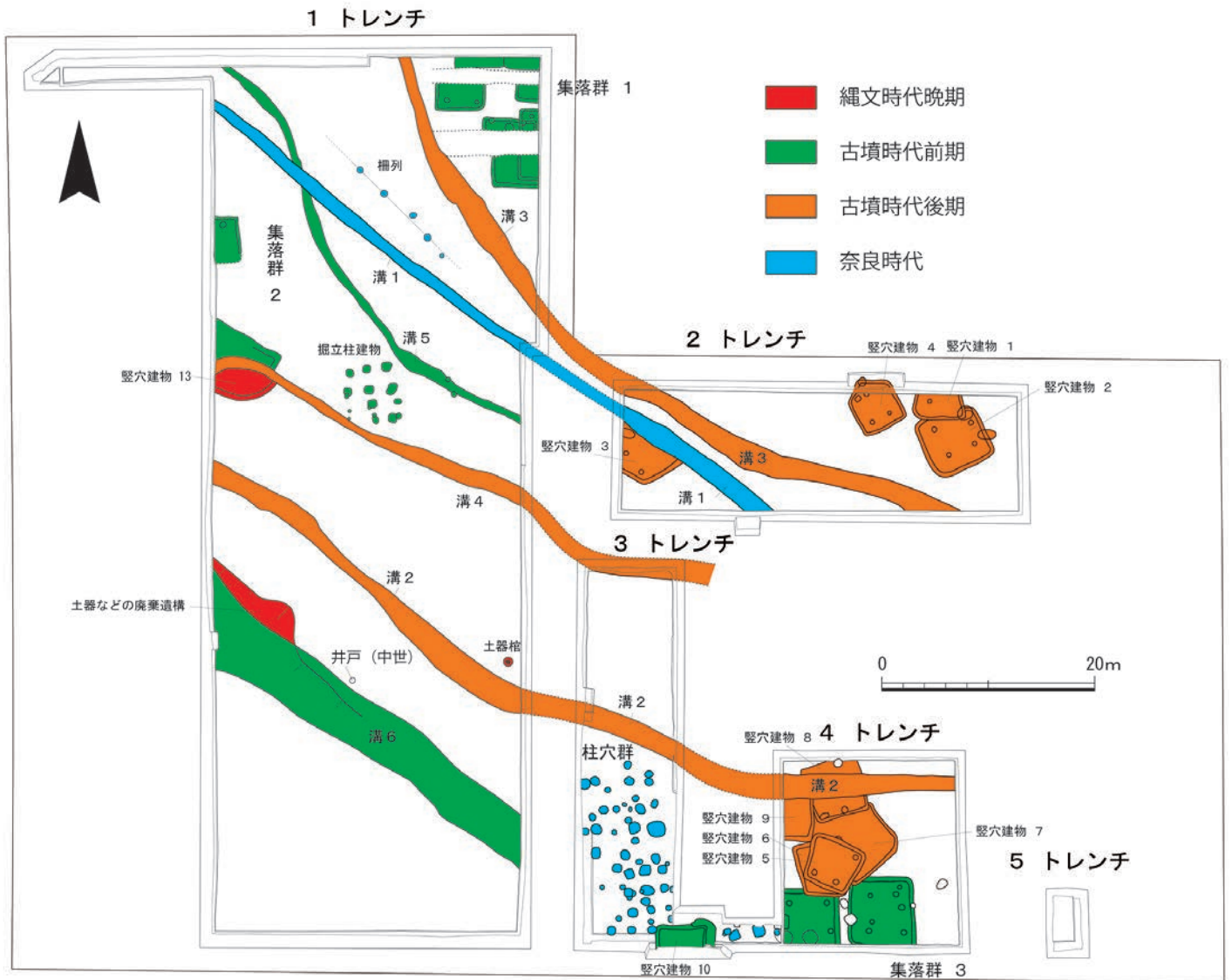
第1図 小樋尻遺跡周辺の主な遺跡



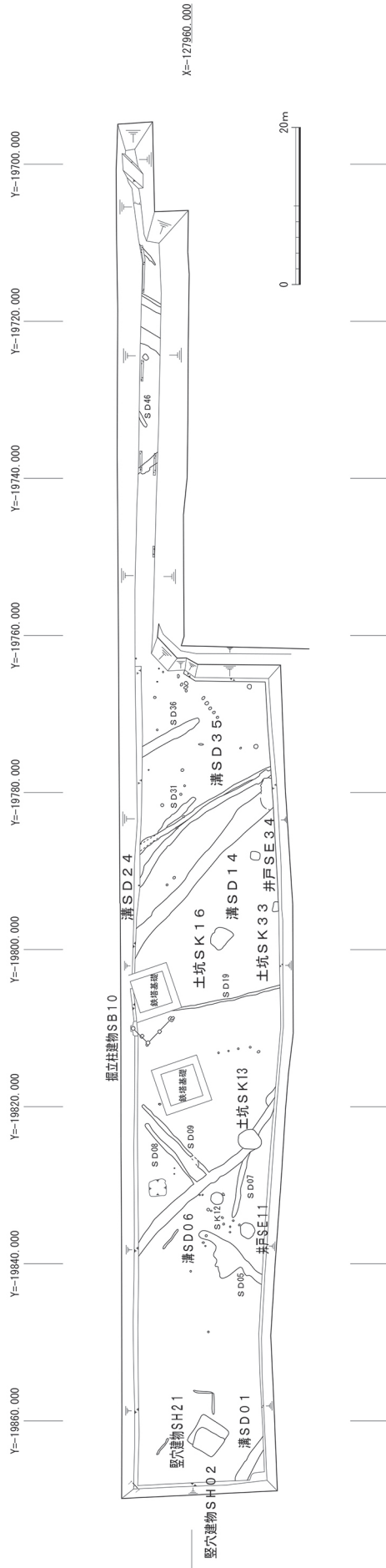
第2図 小樋尻遺跡調査区配置図



第3図 A地点自然流路・溝変遷図



第4図 B地点遺構図



第5図 C地点遺構図



第 149 回埋蔵文化財セミナー資料

発行日 令和 4 年 9 月 17 日（土）

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189

